

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No.23 2019*

長崎：映画事始め  
－芝居小屋から活動写真館へ その2－

山 川 欣 也

Early Movie Theatres in Nagasaki (2)

YAMAKAWA Kinya

長崎外大論叢

第23号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2019年12月

# 長崎：映画事始め

## — 芝居小屋から活動写真館へ その2 —

山川 欣也

### Early Movie Theatres in Nagasaki (2)

YAMAKAWA Kinya

#### Abstract / Short Outlines (概要)

The first moving picture in Nagasaki was screened using the cinématographe method. The date and time was May 21, 1897(Meiji 30), and the place was within the Yasaka Shrine. Though the play in showhouses(misemonogoya) had been accepted by people in Nagasaki, the number of theatrical showhouses screening movies gradually increased as movies became popular after that. The change of preferences of in the fields of entertainment and pastimes among the people in Nagasaki led to a steady shift towards the movies.

This essay aims to clarify the process of movies becoming established in Nagasaki as people's entertainment.

#### キーワード

芝居小屋 活動写真 長崎

#### はじめに

前稿では、長崎における映画興行の嚆矢を確定し、芝居小屋や見世物小屋における一般大衆の娯楽が活動写真館という場へと広がる過程をラフにスケッチしたところであるが<sup>1</sup>、前稿以降の調査の進展もあり、引き続き、映画が娯楽として長崎という地に定着していく変遷を今少し詳らかに眺めることで明らかにしていきたい。地方都市でも博多や熊本における映画史はあるものの、長崎におけるこうした興行形態の調査研究はほぼ未開拓であるといえることから、こうした歴史の掘り起こしに寄与するものとする。<sup>2</sup>

本稿は、当地に於ける最初の映画興行が行われた1897年から最初の常設活動写真館が誕生した1910年までを対象として、映画が、娯楽として、長崎に定着していく過程を明らかにしていくことを目的にするものであるが、今回は紙幅もあり、1897年から1903年を射程とする。

#### 1. 長崎におけるシネマトグラフとヴァイタグラフ

まずは、前稿において宿題となり、その後確認できたことを記しておきたい。

一つは、長崎において初めて映画が上映されたのは1897（明治30）年5月、八坂神社境内で、シネマトグラフによって興行されたことはすでに確認されたが、その際に新聞広告に出された文言の中にあつた「技師シエレル氏カ」は当時来日中であつたリュミエール商会のコンスタン・ジレルではないかという推測が妥当かどうか、また長崎の上映に直接携わつたのかどうかといった点である。

この技師の名前表記に関しては、長崎以前にシネマトグラフ興行が行われた東京やその他の地方の

資料によって様々なカタカナ表記（ジエケル、ジエール、ジュレール等）がなされている（リュミエールも、レミールとカリミエール等の表記）ことがわかったので、「技師シエレール氏」はリュミエール商会の技師コンスタン・ジレルのことで間違いない。では、地方を回るシネマトグラフ巡業（いくつかの班に分かれていた）に合わせて各地をジレルが巡ったとして、5月21日から（最終的に6月6日迄）行われた長崎でのシネマトグラフ興行に技師ジレルは携わっていたのかどうかであるが、このジレルは同年5月27日には、大阪南地花遊園での撮影に立ち会っていたようであることから、少なくとも27日前後数日は長崎の興行に携わっていないことははっきりしている。<sup>3</sup>ただ、ジレルを調査した光田由里によれば、「ジレルは後年、瀬戸内海や富士山、名古屋、長崎などの思い出話を好んでしていたようだ」とあり、これが事実であるとすれば、その長くはない日本滞在中に長崎に足を運んでいたことになるが、やはり「詳細はよくわからず」、現時点で明らかにすることはできなかった。<sup>4</sup>

今ひとつの宿題は、1897（明治30）年、『鎮西日報』（11月27日付）に記された栄の喜座における「寫眞活動西洋奇術大幻灯今晚より興行」は、『新長崎年表 下』に「駒田好洋がヴァイタスコープ（活動写真）を長崎に於て初めて興行」と記されていたことを意味しているのかどうかであった。駒田巡業隊の日程を詳細に特定した前川公美夫によれば、1897（明治30）年においては、長崎に限らず九州地区に巡業したとはいえないとされていたこともあり、確認できないとしていた。しかし、栄の喜座ではないにしても、同時期に長崎で映画の上映が行われていなかったわけではなかった。実は、11月16日から25日にかけて計5回（16日、18日、20日2回、25日：14日に試験を兼ねた私的な上映会があったようだ）、ヴァイタスコープ方式によって行われていた。ただ、この興行は外国人居留地のパブリック・ホール（Public Hall）で行われ、主催したのはマルコヴィッチ（S. L. Marcovich）なる人物によるものであった。<sup>5</sup>

このパブリック・ホールでの上映会主催者であるマルコヴィッチについては、その後『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿』が刊行されていることを知り精査してみると、明治33（1900）年に報告された「外国人戸数人口調査表」及び明治42（1909）年の「長崎港在留各国人員戸数明細表」に、大浦町14番在住のモンテネグロ人で「エス エル マルコウヒッチ（後者ではエス、エル、マルコチッチ）」と表記される人物がおり、またその職業欄には「蓄音器師（後者では蓄音器営業）」とされていることがわかった。英字新聞 *Nagasaki Press* の広告欄での表記が S. L. Marcovich であることから、11月のパブリック・ホールでの上映会主催者は当時大浦町14番地に住んでいたこの人物と特定して間違いないであろう。<sup>6</sup>

とまれ、1897年11月の長崎においては、エジソン社のヴァイタスコープ方式での初上映が行われたことは間違いないが、駒田巡業隊による興行ではなかったことが確認された。ただ、前稿でも触れた『鎮西日報』（11月27日付）に記された栄の喜座における「寫眞活動西洋奇術大幻灯今晚より興行」は駒田巡業隊によるものでないこととなることから、ではいかなる巡業団によるものであったかは依然不明と言わざるをえないが、上映方式については、後述する1899年12月の栄の喜座興行と酷似していることからヴァイタスコープ方式である可能性が高いと考えられる。<sup>7</sup>その他、活動寫眞興行については、5月と11月以外に記すべきことは残念ながらない。<sup>8</sup>

とはいえ、少なくとも、1897（明治30）年に、シネマトグラフとヴァイタスコープ、当時世界を二分していたとも言える活動写真の両方が長崎において上映されていたことが確認できたことになる。ちなみに、年の瀬も押し詰まった同年12月28日付の『鎮西日報』4面広告欄に以下のような内容の広告

(注：原広告は縦書で、●は引用広告に付されている印のママである。以下の新聞引用の●●も元記事に付されているもの。)が出ている。

「●活動寫真器械 (一名自動幻燈) 舶来一台に付金四百円 弊店製一台金二百五十円

右は弊店にて本年二月率先輸入し爾来種々苦心の末舶来品に勝る精巧品を製出し

輸入品と共に販売致候間御購求被下度候又た右に使用する寫真も種々有之候

●幻燈器械 一台一円より卅円迄十一種 ●瓦斯幻燈六十円 ●電気幻燈一台金百円

●映画 教育宗教其他五千種

右詳細なる定価表は郵税二銭御送り次第進呈可仕候

東京新橋南金六町十三番地 吉澤商店幻燈部 』

広告主吉澤商店は、幻燈器械を扱ってきた商店である。同年から本格的となる日本における活動写真導入のルートの一つを担い、いわゆる上映方式でいえばシネマトグラフ系列であるのだが、ここではシネマトグラフという用語は打ち出されておらず、活動写真器械についても「苦心の末舶来品に勝る精巧品を製出」して販売していることを前面に出している。その後、上映方式の機種が問題ではなく、上映される活動写真のコンテンツが重要となることからいえば、一方式に拘ることは得策でないとの思惑があったのかもしれないが、それはそれとして、幻燈販売で実績があった吉澤商店の将来を見据えた意欲的な広告であるといえそうである。<sup>9</sup>

## 2. 1898 (明治31) 年以降の活動写真

さて、シネマトグラフとヴァイタスコープ両方の活動写真上映が行われた年が明けて以降、長崎において活動写真上映が急速に進展したのかといえ、そうといえる状況ではなく、見世物娯楽は依然として歌舞伎、芝居、浄瑠璃、寄席といった従前賑わせていた興行が中心であった。なお、以降の調査については、もとより複数の資料を参照すべきこととするが、主として当時発刊されていた新聞記事に依ることから、閲覧可能な新聞が複数でない場合もあり、その限りではないことを予めお断りしておく。なお、新聞記事の表記を若干改めている箇所あり。

### (1) 1898 (明治31) 年 ~ 1899 (明治32) 年

1898 (明治31) 年、「活動寫真」が登場する記事 (興行だよりなど含) は見当たらず、常設小屋等で活動写真が興行されることはなかった。2月11日から行われた舞鶴座の「一大合併大一座興行」は、英国人による催眠術、日本手品大水芸、西洋奇術、最新舶来發音機、西洋音楽隊、ジャグラー操一による奇術によるものであるが、「舞鶴座も余地なく日没札止めとなるの有様にて 頭巾の中より鐘詰燈籠鳩の顕出は驚くべく 空中の天女は感ずべくブラックの催眠術と共に奇術中の奇なるものなりと評判高」と記された。<sup>10</sup>この種目の中に活動写真は入らなかった。

夏期は、どうも雨天日が多いことや暑さなどもあり興行は閑散期になっており、いわゆる興行案内の記事も減るのだが、例えば、8月の舞鶴座の「大阪初下りの尾上多見丸」一座の興行では、「炎暑の頃に付午前正七時」に始め「初日より五日間は午前八時まで来たりし観客には場代なしに平場にて見せ」とあり、これ以外でもかなり朝早い頃から開演する場合があり、閑散期には閑散期の興行上での工夫もなされていた様子がうかがえる。<sup>11</sup>11月16日、17日と長崎慈善演芸会が舞鶴座で行われている (昨年は12月) が、今年も演目に活動写真が入ることはなかったようだ。<sup>12</sup>一年を通して、何れの

小屋も様々な芝居、演芸などを催しており、「大入り」、「日延べ」といった記事も多く見受けられた。

1899 (明治32) 年に入り、正月興行の記事には「天気にも申分なくさすがにお正月だけありて三座 (注:大浦七樂座、舞鶴座、祇園座) 共負けず劣らずの景気なりし」とあり、正月とはいえ見世物興行の盛況ぶりを伝えている。また、当時はある小屋で当たった演し物 (あるいは一座) を横滑りで別の小屋でも興行をすることが少なからずあり、例えば、正月興行において当たった女壮士一座は、大浦七樂座終了 (1月11日) 後、栄の喜座 (正月興行に出遅れていた) にて引き続き興行 (1月13日から) し、「中々大人気にて每晚札止め」といったように、後に、活動写真でも行われるようになる興行手法があった。<sup>13</sup>

1898 (明治31) 年以降、初めて「活動写真」が確認できる興行だよりが3月2日になって以下のように唐突に出てくる。また、記事同日の4面には広告も出されている。<sup>14</sup>

「●祇園座の興行 八坂町祇園座にては明三日より佛國自動幻畫協會一座の電気応用活動写真即ちシ子マトグラフの興行を三日間催す筈なりと」

しかし、3月8日には記事ではなく広告で以下のように伝えられる。

「●シ子マトグラフ興行

開場延引ノ處荷物到着彌 本月八日ヨリ開演賑々敷御來觀ゾ乞

三 月

祇 園 座」<sup>15</sup>

最初 (1897 (明治30) 年) の長崎での興行広告では「シ子マトグラフ」表記で、「ネ」が「子」となっていたのはわからないでもないのだが、上映方式の名称など随分と馴染みになったこの期に及び、今回の興行広告で当初から「シ子マトグラフ」とされる表記に違和感を覚えずにはいられない。とまれ、長崎においては久方振りのシネマトグラフによる興行が行われた。上映された映画については、以下のような状況を伝えるだけの記事しかなく、内容については不明なのが残念であるが、大入りであったことは、珍奇な物珍しさもあったであろうが、長崎の人々に活動写真への希求性が潜在的にあったことがうかがえる。

「●祇園座の大入 同座外國戻りの幻燈は非常の大入にて一昨夜の如きは観客夕方より木戸に詰め掛け札止となり為めに素戻りせし者も尠からざりしとは先づ結構なり」<sup>16</sup>

当初の予定から遅れて3月8日に開演した興行は、当初の予定とされた「三日間」ではなく、どうも3月16日まで一週間以上なされた。<sup>17</sup>興味深いのは、この興行後、これも活動写真興行と同じくらい久方振りに「吉澤商店」の広告が新聞に出されたことである。広告には、幻燈各種とあり、改良幻燈器械、瓦斯幻燈、電気幻燈それぞれ値段が明記され、自動幻燈 (活動写真) には二百五十円とのみ記されている。<sup>18</sup>さらに、翌4月2日付の『鎮西日報』2面に、

「●七樂座の活動写真 大浦七樂座にて興行中なるシ子マトグラフは雨天の為め兩夜休止せしも昨夜より復た相始たり」

とあり、その始まりを確認することができないが、先3月の祇園座興行終了後、時をおかずして七樂座へと興行を移すことになったようである。これは当初から予定されていたことなのか、それとも突発的な横滑りなのかを詳らかにすることができない。

その後、夏期に入るにつれ小屋の閑散期となり、6月7、8日と栄の喜座で「改良活動 (教育衛生) 大幻燈會」が行われたり、8月25日に栄の喜座で煙草販売の村井兄弟商会によるエジソンの大聲發音



器を使用する催しなどが興味を引くぐらいで、7月20日付に八幡座は現座を取り壊しての新設を計画とあり、また9月8日付に「予て増築のため休業中なりし八坂町祇園座にては今般其工事も落成したれば」との記事ありで、ごく一部を除き芝居・演芸興行は低調であったのも理由なしとしない。

11月に栄の喜座で行われた長崎一座による興行(11月2日～11月23日?)は、その藝題の中に「(大)幻燈」が組み込まれ、諸国名所、大阪俳優の晝は婦人に大受けし、日清戦状等は学生連に受け、「評判は大々の吉なり」との評価を与えられている。<sup>19</sup>常設小屋の藝題の中に「幻燈」が入り始めた。毎年この季節恒例とも言える慈善演芸會であるが、今年度は盲啞院基金及び天災等の救済金を目的とし、11月28、29日の開会で、演芸種目によりやく「幻燈」が入った。ただし、「幻燈」担当は当地七樂座で興行中の長崎一座で、今年度も「活動寫眞」は種目に入ることはなかった。<sup>20</sup>

12月に入りようやく活動写真の文字が登場する。12月1日から栄の喜座で興行の藝題の一つとして行われるとの広告が11月30日(翌12月1日も)の『鎮西日報』にのった。すなわち、

「米國理學博士エジソン大改良活動寫眞藝技手踊 並に 松旭齊天慶の西洋奇術數回

栄之喜座に於て開場仕候間続々來場あらん□迄

十二月一日 午後五時より開場

栄之喜座 』

とあり、これは2年前の1897年11月栄の喜座興行(活動写真と西洋奇術の組み合わせ)とほぼ同じフォーマットである。広告で「エジソン大改良活動寫眞」とあるので、ヴァイタスコブ式での上映に間違いはない。広告に「藝技」とあるのは「藝伎」の誤植ではないだろうか。そうすると、小西写真店の店員だった浅野四郎がゴーモン・カメラで撮影したという、日本製映画の第一回興行で上映された「藝伎手踊」の可能性が高くなるのだが、おそらくそう判断しても良いだろう。<sup>21</sup>

翌日の12月1日付4面には、これまでとはかなり異なる「吉澤商店」の広告(原広告は縦書)が出されている。

「 新製幻燈映画(説明書付き)

●通俗黒死病豫防法 大形二十枚一組 金四円 同十二枚一組 金二円四十銭

右は今回医学諸大家の賛助を得て調整仕候間御注文奉願士候

此他衛生、教育、宗教、農業等の映画幻燈定価表は御報次第進呈

幻燈並に映画 活動寫眞器械各種

東京新橋 南金六町十三番地

吉澤商店幻燈部 』

今回の広告は、「幻燈」押しで、1897(明治30)年12月28日付の『鎮西日報』4面広告の「活動寫眞」器械が全面に押し出されていた広告とはかなり違い、遠慮気味に“当店は活動寫眞も取り扱っています”と記されているようで、当地での「活動寫眞」押しを諦めているのであろうか。<sup>22</sup>

## (2) 1900(明治33)年～1901(明治34)年

年初の興行においてはこれまでと変化はなく、例えば舞鶴座にて行われていた改成義團一座の壮士芝居について「観客引きも切らず毎日午前九時より開演し夜十時前後に及ぶ」と記されているように盛況ぶりを伝えている。<sup>23</sup>

1月30日には、前年夏より八幡町に建築中であった「八幡座」で落成式が行われ、大坂若手一座の興行が開演し、「なかなかの人気引立ちにて観客場内に充満」とあり、再び歴史ある小屋が戻ってきたといえそうである。舞鶴座についても2月1日に初日を開けた興行は、前夜近隣で火事があったが、

「当時人気の成十郎土佐千両の友五郎一座なれば午後よりは八幡座を通り抜け好劇家の入場多」という賑わいであった一方で、2月中頃舞鶴座が舞台修繕のために数日休演した際には、八幡座は「開演以来非常の大引立て」だが、季節も良くなり「且昨日より舞鶴座は休業と来るより中々の大入り」といった具合に、小屋それぞれお客の呼び込みは順調で見世物興行の衰退といったことはみられない。<sup>24</sup>

実は、見世物興行はいわゆる常設小屋のみでなされていたわけではなく、短期的な仮小屋や空地のような場所でも行われることも多かった。同年のこの時期に限っても「是迄浦上新道にて興行の曲馬は館内七十五番の空地にて本日より興行し 木戸六銭に棧敷平場十三銭の由 浦上にての大入に味を食ひ小屋掛け等も大仕掛に張込み居る由なれば、十四五日は興行せん積りなるべし」と記され、町中のどこでもということはないが、許可された相応場所で短期的な興行が行われていたようで、それもかなりの人出を集めていたようなのである。そうした見世物が後になって、更に人出を呼ぶことができる常設小屋にかけられることもあったと考えられる。<sup>25</sup>

この時期、活動写真の記事は出てこないが、「幻燈」については、3月に熊本の貧児寮のための「慈善幻燈會」が栄の喜座で2日間にわたって行われたことが記事になっている。<sup>26</sup>その数日後に、今回は年月をおかず（前は約3カ月前）「吉澤商店」が広告をのせている。これまでの興行記事と広告を俯瞰してみれば、やはり、今日で言うメディアミックス、そこまでではないにしても、芝居の場合、顔見せなどと称して芝居初日の前に町廻りなどして宣伝につとめていたと同じように、この手の広告は当地での興行にあわせて、直接・間接何かしらの連動でのせられていると考えて良いだろう。<sup>27</sup>

同年活動写真上映が確認されるのは、6月17日に「●七樂座の活動写真 大浦七樂座にては今晚より活動写真の興行ある筈なりし」との淡々とした記事が確認されるのが最初で、本興行の内容や詳細は伝えられておらず、以後も同年内に活動写真の興行を伝える記事はなかった。前川によれば、同年、駒田好洋の巡業隊が九州を興行したとされ、長崎もそのルートにはいっているようなのだが（日程は明確ではない）、上記の七樂座の興行日程の際には北海道巡業を行っていたことがはっきりしているので、少なくとも長崎の七樂座での興行は別の巡業隊によるものであるといえる。しかし、現時点で七樂座の興行が誰によって行われたかは不明で、長崎に活動写真巡業で駒田が訪れているとしても、その興行記事を確認することはできなかった。<sup>28</sup>また、同年の慈善演芸會であるが、同年も「幻燈」は演芸種目として入っているものの、活動写真種目は加わらなかった。<sup>29</sup>

同年、活動写真の展開を大きく作用する事件が起こる。いわゆる義和団の乱（北清事変と呼ばれる）であるが、義和団鎮圧のため欧米列強七カ国と日本が派兵した清国の動乱は、映画制作の対象となった。これまで、芝居小屋、演芸舞台では、戦争（戦国ものや侍もの、近代戦争もの）を内容とする演し物は興行的に大入りとなることが多く、この頃から、海外でのボーア（南アフリカ）戦争（英杜戦争）や米西戦争を写したとされる活動写真が輸入されて（幻燈写真も含む）、戦争実況を内容としたいわゆるニュース映画が耳目を集めるようになってきていた。北清事変にあたり、吉澤商店はカメラマンを派遣したのである。北清事変を取材・撮影した活動写真は、同年10月18日に錦輝館で公開され、その後都市部から順次地方へと興行され、また複写フィルムの販売も地方の興行主から請われて行ったようである。それほど各地の興行主から（お客から）人気があったということになる。<sup>30</sup>ただ、長崎では、北清事変を前面に出した「幻燈」と「活動写真」の広告は見当たったのだが、『鎮西時報』による北清事変の活動写真興行は同年では確認できなかった。<sup>31</sup>

翌年1901（明治34）年に入り、八幡座の正月興行では改成義團一座による「北清事件東洋戦争實記

義和團蜂起より北京城門陥落迄 二十五幕」が行われている。同年上半期で最も耳目を集めたのは、4月の川上音二郎一座の舞鶴座での興行であろう。『鎮西日報』でも「川上新演劇漫評」等大きく扱われている。5月6、7日に舞鶴座で「岡山孤児院慈善音楽幻燈會」（四千を超える聴衆が集まったという）が行われているが、活動写真の上映はなかったようだ。同年最初に「活動写真」が出てくるのは5月23日付の「大相撲の活動写真」記事で、それも以下のように、すでに興行開始後幾日以上も経っており、日延べの日延べを知らせるものであった。<sup>32</sup>

「●大相撲の活動写真 八坂町祇園座開設以来初めての大人氣を得たと云う東京大相撲の活動写真は又々明廿四まで打つ事となり昨日も雨天ながら太鼓を廻し居たりと（どうやら長崎も江戸らしうなッて來たとさァハ、ハ）」

相撲の活動写真は、前年大阪、京都、東京などでも満員の好況だったもののように、従来相撲人気の高かった長崎にこの活動写真が廻ってきたのではないかと思われるが推測の域は出ない。<sup>33</sup>

7月に入りようやく、北清事變の活動写真が長崎で上映されるとの記事が『鎮西日報』7月21日付2面にのった。

「●祇園座の活動大写真 今晚より同座に於て東洋活動写真と日本活動写真合同大會が乗込み北清事變の電氣應用活動大写真を開演する□写真は専ら我の軍隊の北清に於ける激戦の状を寫し世人をして□義勇奉公の念を奮起せしめんとの皆意にありと云えば特に學生杯にはよき觀物たるべし」

広告内容からすれば、去年の吉澤商店による北清事變活動写真によるものだと思われるが、巡業興行隊が長崎に到来するまでにずいぶん月日が経ってしまっていて、ニュース速報的実写映画としては意味があるようには思えないが、実戦状況を知るという意味では、かなり好奇心、興味を持って観られたのではないだろうか。23日付2面の記事では、「北清事變活動写真は中々の人気にて一昨夜初日より大入札止めなり！」と珍しくも「！」が付いている。

遅れて9月8日付『鎮西日報』3面に、「●八幡座の活動写真 八幡町の同座にては今夜より北清戦争活動写真會を催はす」とあるのだが、これ以後この興行に関する記事が確認できなかった。7月に祇園座で興行された活動写真が、小屋を替えて興行が引き継がれることはあるにしても、またいくら人気を呼べる戦争物とはいえ、おおよそ2カ月にわたって同内容の興行が続くとは考えにくいので、吉澤商店とは異なるものだった可能性が高い。また、同年記事以降、活動写真に関する記事は出てこなかった。

### (3) 1902 (明治35) 年 ~ 1903 (明治36) 年

1902 (明治35) 年、『鎮西日報』で閲覧できた範囲では、「活動写真」と文字が打たれた記事を見つけることが出来なかったが、11月5日付に「●祇園座 活動大幻燈」、7日付に「●祇園座 大幻燈は大人氣にて毎夜大入り」との記事があった。これだけの情報では興行内容もわからず何とも言い難いが、未だ「映画」という用語もなく、まして「活動写真」という言い方もメディアでは広く使用されていたが定着していたとは言えない頃でもあり、「活動大幻燈」という表現からすれば、この興行は活動写真であった可能性はある。なお、それ以外の芝居や演芸などの見世物興行は、従前と変わらず賑わっている様子がうかがえる記事が多く見受けられた。<sup>34</sup>特に、日清戦争の軍談や北清事變実況談などは、年間を通して舞鶴座、栄の喜座、七樂座などの小屋で興行がなされ、いずれも好況であった。



10月から11月の舞鶴座興行の安本龜八作による日清戦争生き人形は大人気となり、興行主はかなりの実入りがあったようだ。<sup>35</sup>

同年、11月に「布袋座」なる寄席が今町に新たに設けられた。開業当初は「吉田菊五郎一座の水藝なるが非常の好評なり」と順調のようだったが、12月になると「今町布袋座にては木戸銭入らずに景品券まで添へるとの大勉強」とかなり集客に難儀しているように見受けられる。<sup>36</sup>また、寄席や小屋ではないが、同年9月、本石灰町に、後に「満知多座」を経て「南座」となる、「町田観商場」が開店している。<sup>37</sup>

1903（明治36）年、正月興行より2月まで、相当な大人気となった2月の八幡座の「坂本龍馬」を除けば、特に大きな演芸興行は見られないものの、例年通りの年初といったところで、3月に入り、活動写真の文字があらわれる。これも八幡座の興行で、「巴里シ子マトグラフ會社日本代理店京都活動写真協會」の「大活動写真會」が3月3日より行われ、「其影採伎倆中々巧妙にして一昨夜の如きは午後六時迄に満場立錐の地なきまでの大入にて札止めをなしたりと云ふ好評判」であった。<sup>38</sup>この興行について、これまでに記事では見られなかったことが書かれてあり、それは「師範学校始め其他各學校生徒等每晚三四百名宛觀覽の申込ある由にて中々の大人気なり」との記述である。<sup>39</sup>

学校教育の一環として、世界の多様な姿を映し出す活動写真を教材として活用しようとするのは、活動写真業界として歓迎すべき事だったのであろうが、何がしか別な意図があったとするならばどうであろうか。<sup>40</sup>この活動写真興行に限るだけでなく、日清戦争軍事講談、北清事変芝居などが非常な人気を博すといった、何かが醸成されつつあった時代の空気感を増幅する役割を担わされることになる。本稿は、かかることを明らかにするのが目的ではないので踏み込まないが、例えば、これ以降（この後日露戦争が起こる）のメディアを考察する上で欠かせない視座である。とまれ、本興行の活動写真の内容について、初めてと言っても過言ではない程紙面を割いて記事にしている。

「●八幡座の活動写真 去る二日より同座にて開會したる活動写真は英國皇帝陛下戴冠式と北清聯合戦争にして何れも我日本には大關係ある事件と云ひ且つ發明元の日本代理店が出張したる事として従来とは趣きを異にし器械等も物の中央に現はれて一般觀客の觀覽に供し居れり映画は凡て長大尺にして且つ鮮明なり其中重なる北清聯合軍戦争は義和團蜂起して外国人を慘殺する所より太沽砲臺沖大海戦、天津附近に於ける某國大敗北、天津城に捕虜を護送する有様、北京總攻撃等恰も戦地に有るが如き感ありて壯絶快哉云はん方なし英國皇帝戴冠式は非常に長大尺にして英皇陛下の御通輦に近衛騎兵の威儀堂々と前驅護衛の有様御通輦の際に數萬の拜觀者の歡喜する右様各皇族各國派遣大使の倍從する光景の如き眼前戴冠式を拜觀する心地して思はず萬歳を呼び 又其他巴里萬國大博覽會全景 空中飛行器、西洋演劇魔術等 何れも斬新奇抜なるを以て學生は勿論一般の觀覽物に適するを以て 七時頃には満場立錐の餘地なき大入り 」<sup>41</sup>

同年、その後芝居や演芸のいくつかの興行が人気を博すが、活動写真はしばらく間が空く。<sup>42</sup>6月に入って、『鎮西日報』6月17日付3面に「活動写真」の文字が現れる。

「●栄之喜座の活動写真 今回同座に於て開會の筈なる活動写真はエジソン氏最新の發明にして映画少しも震動せず活動写真製造主任ハンガリハアントンゼンセン米國人クンドアンコアの兩氏渡来し東京歌舞伎座新富座等にて好評を博したるものにて繪畫の重なるものは、世界最大氣船シベリア號乗出帆、西印度ペリー山噴火、大阪大博覽會、スペインと米國の戦争等にして其他數十種なりと 」

この巡業隊がどのルートによるものかははっきりしない。前川の調査によれば、少なくとも駒田好洋率いる巡業隊が同年長崎に到来したと確認されていないので、現段階ではおそらくヴァイタスコープ系の巡業隊（駒田が属した広目屋系）であろうと推測される。ただ、興行に関する詳しい追い記事はなかった。<sup>43</sup>本稿に間に合わず残念であったのは、この記事に出てくる「活動写真製造主任ハンガリハアントンゼンセン米國人クンドアンコアの兩氏渡来」とある二人の人物について明確に出来なかったことである。エジソン社で、二人組で、来日した事がわかっているのは、ジェームズ・H・ホワイト（James H. White）とカメラマンのフレッド・W・ブレチンデン（Fred W. Blechynden）である。確かに一人は日本語で製造主任との肩書きにして間違いはないのだが、来日したのは今年（1903年）ではなく1898年の2月末から4月末にかけてであり、またその二人を言及しているにしても記事のカタカナ表記から名前が同定できない。これは課題としてさらに調査することとしたい。<sup>44</sup>

下半期では、祇園座での美當一調齊、出島埋築地での東京大相撲などが興行的に盛況であったといえる。また、これまで寄席として興行を行っていた栄の喜座が、同年6月に劇場として許可を得て、改築や増築をすすめ、11月29日に、舞鶴座、八幡座と並ぶ劇場として、新たな出発をしている。<sup>45</sup>そんな中で、活動写真が出てくるのは11月末の祇園座での興行で、「◎祇園座 東京鈴木千里の活動写真は頗る好人気にて初晩より大入り」とあり、その映画についても「映画鮮明趣考嶄新」で「毎夜替りにて大人気」で、「相撲と荒五郎を相手の大奮發」だったという。<sup>46</sup>

年が変わり、1904（明治37）年の正月興行は従前と違ったところだが、2月に入ると、これまでに有り得なかったことが起こる。八幡座と祇園座で同時期に活動写真興行がなされるのである。<sup>47</sup>

（未了）

## 注

- 1 拙稿「長崎:映画事始め - 芝居小屋から活動写真館へ -」『長崎外大論叢』、第22号、2018年。
- 2 例えば、能間義弘『福岡博多映画百年』、今村書店サンクリエイト、2003年。安田宗生『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆演芸』、龍田民俗学会、2007年。九州以外で最近では、板倉史明編著『神戸と映画 映画館と観客の記憶』、2019年。なお、記述の参照資料としては、当時発刊されていた新聞を主として利用することとし、1897年から1910年までは若干期日を除いて『鎮西日報』を利用し（1901年まではこれのみ閲覧可能）、1902年以降1910年まではこれに加え、『東洋日の出新聞』、『長崎新聞』、『九州日の出新聞』、『長崎新報』を可能な限り併行参照する。また、当時長崎で発刊されていた英字新聞 *Nagasaki Press*（1897～）も必要に応じて参照する。かかる新聞閲覧については、長崎歴史文化博物館所蔵、長崎県立図書館所蔵のものを利用させていただいている。記して感謝する次第である。
- 3 塚田嘉信『日本映画史の研究 活動写真渡来前後の事情』、1980年、123、159頁。映像は、1962（昭和37）年にフランスから寄贈された、いわゆる『明治の日本』（リュミエール社）と呼ばれる映画29本の中に納められている。（東京国立近代美術館フィルムセンター『カタログ 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより』、2004年）なお、長崎への交通手段についていえば、まだ鉄道が長崎まで開通していなかった（九州鉄道の長崎と門司が早岐回りで全線開通するのが翌年1898年11月）。
- 4 光田由里「ジレルとヴェール 世紀末日本を訪れた二人の映画技師」、『映画伝来 シネマトグラフと〈明治の日本〉』、1995年、56頁。長崎巡業に合わせて長崎を訪れたとして、5月21日は「初日の事とて痒い處に手の届かざる如き感なきに非らざりし」と記事（『鎮西日報』1897(明治30)年5月23日付、2面）にあり、記事が映写自体について言及しているとすれば、技師ジレルが映写機を回さないとしても興行当初はその場にいなかった可能性はある。そうであれば、27日の大阪での撮影後5月末以降の滞在と考えられるわけだが、九州巡業（5月9日または10日から下関弁天座、その興行終了後長崎へ）に帯同し、27日数日前に帰阪したとも考えられる。（武部好伸『大阪「映画」事始め』、2016年、75～76頁）これ以外にもいくつかの足跡が想定可能だが、いかんせんいずれも確認できない。（塚田嘉信『映画史料発掘7』（私家版）、1972年）ちなみに、リュミエール社『明治の日本』の1本にジレル撮影の「港での荷下ろし」と付けられた映像があるが、この撮影地は横濱のようだが不明確。
- 5 前川公美夫編著『頗る非常 怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、2008年、382、465頁。パブリック・ホールでの上映会については、*Nagasaki Press*（Nov. 13, 15, 16, 18, 19, 20, 22, 23, 24, 25, 1897）。広告によれば、上映に使用された映写機は、

- 「EDISON'S PROJECTOSCOPE (1897 Model)」とあり、ヴァイタスコープ方式による興行であったことは間違いないようである。記事によると、映写機は試験上映では「他種でみられるような震動もなく」(16日付2面)とあったが、「マルコヴィッチ氏の映写機の扱いは(火曜日より)上手くなった」(20日付2面)とあり、氏は映写技師とか撮影技師といったような機械の扱いに長けていた人物ではなかったかもしれない。興味深いのは、上記の「他種でみられるような震動もなく」と記事にあることから、記者は他の機種による活動も観ているように思われることで、長崎で確認できる範囲では、1897(明治30)年5月下旬から6月上旬に八坂神社で行われたシネマトグラフのみなので、少なくともその機種よりは良かったと読むことが出来る。また、この際に使用されたプロジェクトスコープ(PROJECTOSCOPE)は従前の改良型であることから、従前のヴァイタスコープを指しているとも読める。そうなれば、記者は長崎ではない地で活動写真を観ていることになる。上映会は弦楽四重奏付きで、最終上映会ではコロンビア社のグラモフォンでポルカやワルツ等の音楽演奏も行われたようだ。また、土曜日の上映会広告には日本人50セントとある。残念ながら、日本語で読めるこの上映会の新聞記事を見つけることはできなかった。なお、「栄の喜座」の表記は、「栄之喜座」「榎津座」などあるが、本稿においては特に断らない限り「栄の喜座」として統一する。
- 6 長崎県立長崎図書館『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿Ⅲ』、平成16年、263、293頁。
- 7 全くの推測の域を出ないが、パブリック・ホールで供されたヴァイタスコープ上映が横滑りで栄の喜座にかけられたかもしれない。少なくとも、スケジュール的にはパブリック・ホール終了後であることから可能性はあるのではないかと思われる。おそらく、日本における当時の巡業興行ルートに乗っていないとも考えられるので何とも言えないが、だからこそ柔軟な興行体制がとれた可能性もある。
- 8 1897(明治30)年12月17日、18日の両日、舞鶴座にて主として盲啞院基金のための慈善演芸会が行われたが、この中の催しに活動写真という題目は見当たらなかった。(『鎮西日報』12月17日付4面)また、芝居小屋関連では、大浦の七樂座が増築工事をおこなって収容能力を拡大し(『鎮西日報』6月30日付3面)、11月13日には新たな小屋、祇園座が八坂町(シネマトグラフの最初の興行が行われた)に誕生し開業式が行われ、「来観者は満場立錐の地なく非常の盛会」であったようだ。(『鎮西日報』11月16日付2面)常設小屋への需要は高まっていたといえようか。
- 9 ほぼこれとほぼ同じ広告が1898(明治31)年5月22日付の『万朝報』にある。ただし、ほぼというのは若干の文言の違いがあるのだが、着目すべきは活動写真器械の舶来の代金である。この代金だけが12月の『鎮西日報』の広告表記よりも50円下がって、「金三百五十円」になっている。単純には、舶来器械の値段が下がったことが考えられようが、どのようなことがあったにせよ、値段が下がることは器械の普及に寄与することにもなるであろう。(塚田嘉信『前掲書』、224頁)
- 10 1898(明治31)年『鎮西日報』2月15日付2面。  
 先年ルミエール社のジレルが長崎を訪れていたであろうと思われる一方で、この年エジソン社の二人も長崎を訪れていたのである。1898(明治31)年2月24日にアメリカから横浜に到着し、およそ8週間をかけて、上海や香港を回り、長崎にも立ち寄り、また横浜からハワイへと出発したことがわかっている。この二人とは、当時キネトグラフ部門主任になったばかりのジェームズ・H・ホワイト(James H. White)とカメラマンのフレッド・W・ブレチンデン(Fred W. Blechynden)であった。(Charles Musser, *Before the Nickelodeon: Edwin S. Porter and the Edison Manufacturing Company*, 1991, pp.105,111-112)(チャールズ・マッサー(岩本憲見編・監訳、仁井田千絵・藤田純一訳)『エジソンとその時代』、2015年、271頁)
- 11 1898(明治31)年『鎮西日報』8月4日付2面。もしかするとこの時期「おくんち」の影響があるのかもしれない。
- 12 「来観者は支那人西洋人合せて無慮数千人猫も釋氏もおしなへて階の上下に満ち館の内外に溢る時餘にして「来賓満場に付明日御来会を乞」との張紙を門板に掲示さるる盛況は予想の外なりき」とある。なお、慈善演芸会の目的は、盲啞院の経費及び水害救済金であった。1898(明治31)年『鎮西日報』11月12、17、18日付2面。
- 13 1899(明治32)年『鎮西日報』1月5日付3部1面、12日付、15日付、1月26日付3面。ただ、この一座には後日談があり、栄の喜座では女改良二〇加と名乗り大入りをあて、さらに、栄の喜座の千秋楽後、舞鶴座で壮女芝居をなそうとしたが、初日「九十幾人とは舞鶴座開場以来の不大入り」となったとのことである。(1899(明治32)年『鎮西日報』1月29日付2面)
- 14 1899(明治32)年『鎮西日報』3月2日付2面、4面。記事は三日よりとなっているが、広告は四日より開演となっている。3日、4日にも同広告あり。3月5日付の『鎮西日報』3面は、「シネマトグラフの興行昨四日より開演したる由」と既報もなかったかの如く記しているが、実際は八日からの開演であった。このことから、興行日より(に限らないだろうが)は必ずしも正確とはいえないこともあり得ると認識しておく必要がある。ただ、3月9日付では「市八坂町祇園座に於る同興行は機械延着のため延期しおりの愈々昨日より開演したりと云う」と再度訂正ともいえない記事をのせている。また、広告には「皇太子殿下ノ御尊覧」とあるが、これはリュミエール社から派遣されていたガブリエル・ヴェールを中心に、おそらく1898(明治31)年12月22日に東宮御所で皇太子はじめ皇族方を前に行われた上映会を指している。同じリュミエール社から派遣されていたコンスタン・ジレルが長崎での上映会に直接携わったかどうかが不明確である一方で、ガブリエル・ヴェールは1899(明治32)年3月2日に神戸から中国に向かっているため、この長崎の上映会には携わっていないことは明らかである。(光田由里「ジレルとヴェール 世紀末日本を訪れた二人の映画技師」、『前掲書』、76～77頁)
- 15 1899(明治32)年『鎮西日報』3月8日付3面。
- 16 1899(明治32)年『鎮西日報』3月11日付3面。この記事で気になるのは、出だしの「同座外國戻りの幻燈」という箇所。あたかも以前日本にあった映写装置が一旦外国に出て、再び日本へ舞い戻ったかのような書きぶりである。広告によれば、「佛國最新發明」とあるので、シネマトグラフの上映会であろう。『日本映画事業総覧』(昭和2年版)で、横田永之介は「(明治)三十二年に新フィルムを輸入し、再び地方巡業の旅に上り、「初めは佛國幻畫協會と云ったが、後には日本活動写真會と云ひ、又横田商會とも云ふようになった」と述べているので、若干表記に差違はあるが記事の「佛國自



動幻畫協會一座」というのはこの佛國幻畫協會だと判断でき、故にこの興行は横田商会系によるシネマトグラフ巡業部隊だったと言ってよいだろう。(横田永之介「活界卅の思ひ出」、『日本映画事業総覧』、昭和2年版、1927年、436頁)(田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ 活動写真時代』、1975年、47頁)ただ、記事は、この期に及んで「幻燈」と記しているのはよくわからない。

- 17 1899(明治32)年『鎮西日報』3月17日付2面。
- 18 1899(明治32)年『鎮西日報』3月18日付4面。以前の広告には舶来四百円と弊店二百五十円と分けられていたが、今回の広告は値段が一つしかなく、値段だけでいえば弊店製になるのかもしれないが、輸入物なのか弊店製なのかは不明である。約1年後に義和団事件が勃発し日本軍が出動した時、吉澤商店は従軍撮影班を派遣したが、その際携帯したのは小西写真店が輸入したばかりのゴーモン・カメラだったということなので、未だ弊店製は1899(明治32)年初めの段階では完成品とはなっていないかのように思われる。(田中『前掲書』、91~92頁)また、この広告は幻燈がメインであるといえ、自動幻燈(活動写真)はその広告の一部であり、世間一般的には活動写真はまだまだ一般的に通用する存在ではなかったのかもしれない。この時期の『鎮西日報』では2月から6月頃にかけて、大阪の「堀眼鏡舗」が幻燈機械販売の、同じく大阪の「寺田清四郎」が幻燈一式製造販売の広告を数回うっている。
- 19 1899(明治32)年『鎮西日報』11月5日付2面。長崎一座は11月25日から大浦七樂座にて興行開始とのこと。(『同紙』11月26日付2面)
- 20 1899(明治32)年『鎮西日報』11月26日付3面、28日付2面。
- 21 田中純一郎『前掲書』、73~75頁。一連の「藝伎手踊」映画は一括で日本率先活動写真会(駒田好洋主宰)へ後に譲渡された。ただ、駒田が属した「広日屋」の巡業部隊の興行であろうが、今回の興行も駒田率いる巡業隊によるものではなくそうである。(前川公美夫編著、『前掲書』、465~66頁)
- 22 長崎における活動写真への希求は明らかに存在し、事実として、これまでの興行は大入りといった状況を生み出しているため、興行的に利益が出ないわけではなかったと考えられる。にもかかわらず、興業実績が積み上げられスムーズに漸増しないのは、興業の請元や観客が既存の見世物への強烈的な拘りのような何か(あるいは疑念)を持っていたのかも知れないが、映画が大なり小なりドラマを提供できるようになってくるとともに、実際、制作本数も興行館も増えることを考慮すれば、活動写真黎明期の映画が状況や光景の切り取りの繰り返しでしかないことへの倦怠を感じ取っていたこともあり得る。
- 23 1900(明治33)年『鎮西日報』1月5日付3面。
- 24 1900(明治33)年『鎮西日報』2月2日、3日、13日付3面。
- 25 1900(明治33)年『鎮西日報』2月24日付3面。正月には同じ館内で「東京初下りの天樂齊一座の東洋奇術」や「改良二〇加」が行われている。(同年『鎮西日報』1月13日付3面)特に曲芸や動物モノ、いわゆるサーカスの演し物のような興行が広い空地のような場所を利用していただようである。故に、雨天のような悪天候になるとすぐに休業となる。同年同記事の後は暫く記事が記されていないが、翌年1901(明治34)年2月22日の『鎮西日報』3面によろやく「●曲馬の大入り 大浦二十八番空地にて一昨夜より興行の大曲馬は初日より中々の大入りにて礼止めとなりをる由」とあり、3月7日の同新聞に「昨日より十日まで」値下げするとの記事が記されていることから、こうした常設小屋ではない興行でも、長期間行われたものもあったことがわかる。
- かかる見世物興行に関しては、1889(明治22)年1月1日施行の「演芸場並遊覧場取締規則」によって設置場所、運用、建築構造等かなり厳しく制定(いわゆる箱物の常設小屋を建設するのはハードルが高い)され、事前に営業の免許(警察署を経て県庁)を受けなければならず、また興業等についても所轄警察署長の認可となっていた。ただ、1889(明治22)年の県訓令無号「長屋を借受軍談等を為すもの取締の件」で、一時民家を借りて「演芸場並遊覧場取締規則」第1条の技芸の類を行うといった仮小屋建設の必要がない場合、建築構造に関する規則の適用は受けないとされていたことから、本稿で言及する「舞鶴座」、「七樂座」等といった演芸場以外で、かなりの興業(緑日や夜市での見世物含め)が長崎の町中で行われていたであろうことは想像に難くない。(長崎県警察史編集委員会編『長崎県警察史 上巻』、1976年、1209~1216頁)実際、興行の案内がのらない日の新聞であっても、緑日や夜市の情報はほぼ毎日記載(開催される場所は日替わりで、例えば、「今晚は寄合町稲荷神社」)されていた。
- 26 1900(明治33)年『鎮西日報』3月17日付3面。「(熊本貧児寮)貧児の現況を映写し世人に縦覧せしむる」ための幻燈會ということである。
- 27 1900(明治33)年『鎮西日報』3月18日付3面。今回も、広告項目が「幻燈押し」と言えるが、「活動大寫眞器械」、「独逸製 軽便活動幻燈」、「活動寫眞幻燈運転映画」といった具合に、前回よりも「活動」という字句が挿入されており、「活動~」に誘導しようとする意志が感じられないこともない。(田中『前掲書』、91頁)また、今回の広告は同年3月5日『読売新聞』(東京版)の広告でも展開されたものと同じ広告文がのっており、「活動大寫眞器械」というのは、田中によれば、吉澤商店による活動寫眞映写機の販売を意味するという。

ちなみに、「活動大寫眞器械」欄は、

- 「●活動大寫眞器械 付属品各種新荷着仕候  
甲号回転装置附活動寫眞器械 金百八十五円  
乙号回転装置ナシ 同 金百五十円」

とあり、従前よりは安価になってきた。『読売新聞』広告並びに回転装置については、田中『前掲書』(103~104頁)参照のこと。

すでに1897年(明治30)年12月の広告でも舶来とあわせて弊店製とは謳ってはいたが、今回の製品はリュミエール社やエジソン社の製品を自社の工場で簡易化して製造したということであり、本格的な活動写真時代の到来に肅々と備えてい



たといえようか。以下注(30)も参照。

- 28 前川『前掲書』、466頁。  
29 1900(明治33)年『鎮西日報』11月20日付3面。  
30 1899(明治32)年6月、吉澤商店が買い付けた「新作映画『西米戦争大活動写真』その他」の錦輝館での映画上映は「好評を博した。戦争記録映画の魅力を洞察、察知した河浦は北清事変(1900年5月勃発)に早くも従軍カメラマンを派遣、報道映画の普及に成功するとともに、この映画の販売に先立って舶来映写機を改造した廉価な国産機を製造販売、映画興行の普及に役立てた」とある。(田中純一郎「映画製作・興行の創始者たち」『日本映画の誕生』(講座日本映画1)、1985年、90頁)派遣されたカメラマンは「その頃東京で活動写真の撮影をしていた」柴田常吉(当時三越の写真部所属)という人物だった。すでに何本かの映画を撮影した実績があったことが見込まれたようである。(田中『前掲書』、92～93頁)(佐藤忠男、『日本映画史I 1896-1940』、1995年、97～99頁)(吉田智恵男、『もう一つの映画史 活弁の時代』、1978、42頁)  
31 1900(明治33)年『鎮西日報』7月4日付4面には、大坂高麗橋の檜尾商店が「●特別大緊急廣告」として、早くも以下のような広告を出している。(一部略)

「清國事變幻燈映画

●三号形幻燈器械 甲等 金八十五錢 乙等 金六十錢  
●清國事變幻燈映畫 廿四枚壹組説明書附 正價 金六十錢」

この後に、弊店はこれを精巧な幻燈映画に仕立てたので、これをみれば「恰かも列強の精兵堅艦を目撃するに異ならず血湧き肉動くの感あらむ」と説明している。また、「●清國事變画報」なる写真帳で十二銭、「●日本軍先登圖」という「列國聯合艦隊太沽砲臺攻撃」の図も金八銭で販売された。

そして、いよいよ9月22日付の『鎮西日報』4面に、以下のように、吉澤商店幻燈部による「北清事變幻燈映画發賣」の広告がのった。(一部略)

「●北清事變幻燈映画 十五枚一組 金三円

宇品乗船より北京占領迄歐□光線畫 弊店技師深谷駒吉氏従軍撮影

●北清事變實地寫眞映画

右は宇品港にて山口師團長以下將校諸君各聯隊の乗船、太沽、天津、北倉、通州、北京に至る實況を従軍(で)撮影せしものにて第一回北倉迄の分は到着致候に付第二回北京迄の敷板到着を待て御注文順により發送可仕候 大形三十枚一組 金六円」

この他に、「●清國各地名所幻燈映画」、「●清國風俗幻燈映画」、「●幻燈器械」、弊店技師深谷駒吉氏従軍撮影による「●北清事變中判寫眞帖 第一回出来廿四枚」、そして「●活動寫眞器械並に輕便活動幻燈各種」がのせられていた。いずれも北清事變情勢を伝える幻燈の宣伝がメインであった。活動写真用の撮影のためにカメラマンを派遣している、乞うご期待ぐらいのせればより宣伝になると思われるがそうっていない。

なお、吉澤商店が北清事變に派遣したカメラマンは柴田常吉であり、本広告に名前が出ている深谷駒吉は吉澤商店の店員(広告では技師となっている)で、現場と商店側との事務連絡係として柴田に同伴させた人物であり、おそらく柴田が撮影しているのであれば柴田の名前を出したのだろうが、本広告の時点で、8月にはおおよそ事変は終わっていたにもかかわらず、撮影したカメラマンが帰国しておらず、吉澤商店の手元に、幻燈として販売できる写真の一部しか届いてなかった。そして、「十月の初めによく帰って来」たことで、10月18日から錦輝館での活動写真による興行が可能となったのである(二人とも十月帰国だったかどうかは不明)。この10月興行の広告では、「北清事變活動大写真 本会特派員技師柴田常吉氏及び深谷駒吉氏従軍撮影」と柴田の名前が出ている。(田中『前掲書』、92～93頁)

- 32 1901(明治34)年『鎮西日報』1月1日付2面、4月3～9日付3面、5月9日付2面。5月23日付3面。田中『前掲書』、85～86頁。  
33 東京(大阪)大相撲の勝敗や取り組みが記事になり、もちろん長崎興行が行われており、大黒町埋地といった空地に土俵を設けて取り組みが行われていた。もちろん、悪天候休業にはなるが。  
34 同年、7月から10月にかけて、虎列拉(コレラ)の蔓延しかなり死者が出たことも影響したであろうか、芝居関係の案内・記事などはのらなかった。同年『鎮西日報』9月3日付3面には、「●市内の虎列拉」として、新患者数、初発以来総計、入院患者などが記されているが、「●長崎署内の虎列拉」、「●西彼の虎列拉」など、7月の発生時から連日記載されていた。実は、この頃、毎年のように、コレラ、赤痢、ペストなどの疫病が流行し、自治体は疫病対策を迫られていた。ちなみに、同年『東洋日の出新聞』11月29日付3面には、このような記事がのっている。

「●市の傳染病 一時流行の兆しを現はしたる市内の赤痢病も過般鎮滅し猶漸次猖獗の兆候ありし腸隆挾斯も僅かに一名を残して二三日撲滅したれば長崎市は全く健康地となりたり」

と、夏のコレラ、その後の赤痢、腸チフスといった疫病が冬直前になってようやく落ち着いたことがわかる。

- 35 1902(明治35)年『鎮西日報』10月24日付3面、11月6日付3面。同年『東洋日の出新聞』10月29日付3面。  
36 1902(明治35)年『鎮西日報』11月8日付3面、11月19日付3面、12月21日付3面。これは、芝居や演芸へ足を運ぶ客が減っているということではなく、この小屋が見世物興行場としては新参であることから、集客に苦勞することがあってもおかしくないだろう。「布袋座」が客足が芳しくなく、間もなく廃業したというわけではない。年明け2月には、布袋座はかなりの集客を呼ぶ興行を行うようになった。  
37 1902(明治35)年『鎮西日報』9月3日付3面。前者には、  
「●東濱町の町田氏は先に本石灰町の観商場を引受け 總ての建物を改築し 此の程全く竣工を告げしかば一昨日町田観商場と改称して開場式を挙行せり 其建物は二階にして上下各店の配置宜しくして空氣の流通も好

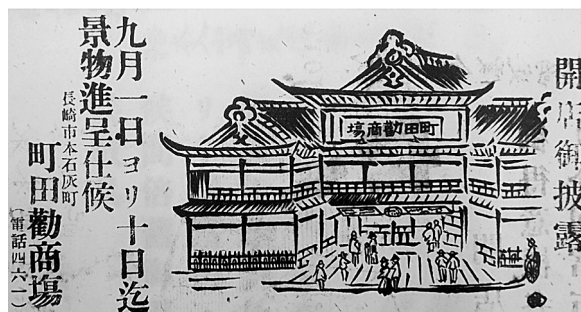
く 殊に顧客の休憩所等を整備したるは用意周到たり 斯くの如く全備したる観商場は世間稀なるべし されば一昨日の如きは開場早々非常に賑わいたるを以て見るも 當場将来の繁昌期すべきなり 唯り同場のみならず長崎繁栄の景象たるべし」

と、当記事は記者が実際に足を運んだ上で記したことがわかり、かなり期待を持って迎えられた様子がうかがえる。

同年『東洋日の出新聞』8月31日付3面の広告が以下。かなりの面構えをしており、本文に記したとおり、この観商場に近い将来演芸場の「満知多座」(1909(明治42)年)となり、「三七三座」(1916(大正5)年)と改称し、そして「南座」(1919(大正8)年)として長崎を代表する小屋の一つとなっていくのである。

- 38 1903(明治36)年『鎮西日報』2月26日付3面、3月5日付3面。

「巴里シ子マトグラフ會社日本代理店京都活動寫眞協會」が興行したのであるが、当時「京都活動寫眞協會」と称していたのは「横田商会」であり、また横田商会がフランスのパテー社(巴里シ子マトグラフ會社)とフィルム購入契約をしていたことから、本興行は横田商会の巡業隊によるものであろう。



- 39 1903(明治36)年『鎮西日報』3月4日付3面。

- 40 かかる論点を扱った当時の先駆的書物として、権田保之助『活動寫眞の原理及び應用』、大正3年。同『民衆娯楽問題』、大正10年。

- 41 1903(明治36)年『鎮西日報』3月7日付3面。北清事変には、吉澤商店からカメラマンが派遣されて制作された実写映画がすでに長崎でも巡業されていたが、日本製ではない海外製の北清事変映画は関心高く観られたのではないだろうか。

- 42 この間、「栄の喜座」の犬相撲、館内から始まって市内の小屋や空地(諏訪神社下から五島町)を点々と廻って多くの客を集めた猿芝居、長崎熊本合併相撲などが話題を集めたようだが、上半期で最も賑わいを見せたと思われるのが八幡座の大坂歌舞伎少年俳優一座であった。新聞紙面の枠から言えば、その記事の扱いは先の川上音二郎一座を越えている。『鎮西日報』の記事の扱い方も別格で、4月26日付の『東洋日の出新聞』は人気投票まで行っている盛り上がりようである。実際、本興行は本来の千秋楽を5月24日までに日延べをし、一度閉幕してさらに「二度の蓋開け」を行い6月8日まで長期公演を行った。(1903(明治36)年『鎮西日報』4月23日付~6月9日付)では、この他の興行は八幡座人気に押されていたかと言えば必ずしもそうでもなく、記事では好況を伝えている。

- 43 前川『前掲書』、467頁。同年『鎮西日報』6月19日付3面に、「●栄ノ喜座 開會中なる活動寫眞は好評にて毎日札止を為し且つ嘗て夜間二回の筈なりしを今回は通しになしたり」とあり、1度だけ盛況を伝えている。

- 44 注(10)参照。また、以下も参照、Charles Musser, *The Emergence of Cinema: The American Screen to 1917*, (History of the American Cinema 1), 1990, pp.232-234。注(10)の *Before The Nickelodeon* では立ち寄り先として Nagasaki が出てきたが、本書では Yokohama は出てくるが、Nagasaki は記されていない。

ビデオ化された『キネマの夜明け 100年前の世界2』には、1898年4月に長崎で撮影された S.S.GAELIC in Nagasaki という映像があり(岩本憲児「映画の到来 エジソン映画と日本」『日本映画の誕生』、2011年、21、22、38頁)、インターネット上のデータベース IMDb では、“Shows a very peculiar way of coaling a great vessel. All hand labor. Men, women and children pass small baskets of coal from hand to hand.”と、紹介されている。(https://www.imdb.com/title/tt0235729/?ref=tt\_urv)2019年9月24日確認)ただ、実際の映像は未確認。

- 45 美當一調齊については、1903(明治36)年『鎮西日報』10月22日付、24日付3面。東京大相撲は、10月末からの興行予定がおよそ一ヶ月遅れての興行となった。この興行については、九州鉄道が広告をのせ、「大村以西各驛長崎間は汽車賃金の二割引往復切符を發賣し同切符所持の者は木戸銭半額にて入場」できたということで、まるで現在 JR九州 が博多座と乗車切符で行いそうなることを百年前に為していたとは驚きである。(同年『東洋日の出新聞』11月28日付3面) 栄の喜座の劇場としての新たな出発を伝える記事は、『鎮西日報』『東洋日の出新聞』いずれにも掲載されているが、以下をあげておく。同年『鎮西日報』12月1日付、3日付3面。本文では述べていないが、実は七樂座も増築を行い、大道具などを新調して「面目を改め」たという。(同年『鎮西日報』10月26日付3面) ここ数年で、いくつかの小屋が改築、増築、あるいは新築、そして劇場への格上げなどを行っている。

なお、美當一調齊については、『鎮西日報』の10月17日付3面広告欄、22日付3面興行案内に以下のような広告と記事がのったので、書き留めておきたい。

10月17日付3面広告欄(カタカナをひらがなに改)には、

「東方亞細亞の風雲は晴か雨かと云ふの時なり 白猫は此の風雲に乗じて支那朝鮮に押し渡らしかと云ふ時なり 茲に 美當一調は一世一代の講談語を納めんとして白猫に餞せん爲め 八坂町祇園座に於て十日間北清事變より昨今の外交變遷に至るまでを演する」となし 尚ほ揚り高の一部を日本尚兵義社へ寄付の筈なり 四方諸君奮って來聴あれ 白猫□ 石井庄三郎」

また、10月22日付3面興行案内には、

「△祇園座の美當一調齊 日清事件と北清戦役の内聴客の望に随ひて講演す 毎日午後六時より開演し一調齊は二席つゝ演じ居れり 一昨夜の初日は殆んど札止めにならんとする大入りなりしと 尚一調齊は齡既に六十を超えたるを以て今度こそは愈々お暇なるべしと挨拶し居れり 殊に今回は豫定の八日間より一日も日延べする能はざるを以て學生に限りては晝間三四時間つゝ、無料にて語り聴かせ居れりと」

- 講談節は、歴史題材だけでなく、時事・社会・政治問題など扱うことも多く、内容や語り手によって小屋の入りも左右したようだが、この時期、日清戦争、北清事変などは非常に注目されたテーマだったといえる。
- 46 「相撲」というのは出島埋築地での大人気の東京大相撲を、後者は栄の喜座柿茸落しの荒五郎一座の芝居を指している。1903（明治36）年『東洋日の出新聞』11月25日付、28日付、12月1日付、2日付3面。1903（明治36）年『鎮西日報』11月29日付3面。「東京鈴木千里活動写真」とは、後に「エス活動写真會」と称せられるようになる活動写真業社で、鈴木撻雲から写真業を譲られた鈴木千里が活動写真業に乗り出した。（前川公美夫編著、『前掲書』、389頁）（「幕末明治の写真師列伝 第五十五回 内田九一 その二十」一般財団法人 日本カメラ財団、[[http://www.jcii-camera.or.jp/business/pdf/photographer\\_biographies55.pdf](http://www.jcii-camera.or.jp/business/pdf/photographer_biographies55.pdf)] 2019年9月22日確認）
- 47 1904（明治37）年『鎮西日報』2月2日付3面。もちろん、巡業隊系列は異なるようである。

### 【参考資料】

- 『長崎市地番入分割図』、大正8年版、聖文社、1919年。
- 文部省普通学務局、『全国に於ける活動写真状況調査』、1921年。
- アサヒグラフ編輯局編纂、『日本映画年鑑』、大正13・14年度、東京朝日新聞発行所、1925年。
- 長崎市小学校職員会、『明治維新以後の長崎』（昭和48年復刻版）、名著出版、1925年
- 『長崎市史 風俗編 下』、（昭和42年復刻）、1925年。
- 『日本映画事業総覧』、昭和2年版、国際映画通信社、1927年。
- 『日本映画事業総覧』、昭和3・4年版、国際映画通信社、1929年。
- 『明治大正国勢要覧』（復刊）東洋経済新報社、1975年（1929）。
- 『日本映画事業総覧』昭和5年版 国際映画通信社、1930年。
- 『全国映画館録』、昭和5年4月現在、キネマ旬報社、1930年。
- 『映画事業名簿』、昭和10年下期版、活動新聞社、1935年。
- 『全国映画館録』、昭和11年度、キネマ旬報社、1936年。
- 文部省社会教育局、『興行映画調査、7』、民衆娯楽調査資料 第11号（2,4,7,9,10～15）、1938年。
- 日本映画協会編、『映画年鑑』、昭和17年。
- 日本映画協会編『映画年鑑』、昭和18年。
- 『全国映画館一覧』、聯合通信社、1946年。
- 『長崎市制五十年史』、長崎市、1952年。
- 嘉村国男、『新長崎年表 下』、長崎文献社、1976年。
- 長崎県警察史編集委員会編『長崎県警察史 上巻』、長崎県警察本部、1976年。
- 若浦重雄、『長崎の歌舞伎 - 長崎芝居年代記 第一集』（私家版）、1980年。
- 『アルバム長崎百年』、長崎文献社、1984年。
- 『続・アルバム長崎百年』、長崎文献社、1984年。
- 『Album 長崎百年』、長崎文献社、1986年。
- 『アルバム長崎百年 戦中・戦後編』、長崎文献社、1986年。
- 帯谷重則、『帯谷宗七伝』（私家版）、1999年。
- 下川耿史、家庭総合研究会編『明治・大正家庭史年表 1868-1925』、河出書房新社、2000年。
- 長崎県立長崎図書館『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿Ⅲ』、長崎県立長崎図書館、平成16年。
- 朱通祥男・永田哲朗『日本劇映画総目録 - 明治32年から昭和20年まで』、日外アソシエーツ、2008年。
- 『新長崎市史』第3巻 近代編、長崎市史編さん委員会、2014年。



## 【参考文献】

- 石巻良夫『欧米及び日本の映画史』、プラトン社、大正14年。
- 板倉史明編著『神戸と映画 映画館と観客の記憶』、神戸新聞総合出版センター、2019年。
- 入江良郎「吉澤商店主・河浦謙一の足跡 (1) 吉澤商店の誕生」『東京国立近代美術館研究紀要』18、2014年、32～63頁。
- 同「吉澤商店主・河浦謙一の足跡 (2) 活動写真時代の幕開き」『東京国立近代美術館研究紀要』22、2018年、6～40頁。
- 同「最古の日本映画について - 小西本店製作の活動写真」『東京国立近代美術館研究紀要』13、2009年、65～91頁。
- 岩本憲児編『日本映画の誕生』(日本映画史叢書15)、森話社、2011年。
- 上田学「映画常設館の出現と変容 - 1900年代の電気館とその観客から -」『アート・リサーチ』9、2009年、49～59頁。
- 加藤幹郎『映画館と観客の文化史』(中公新書)、中央公論新社、2006年。
- 神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編、『神戸とシネマの一世紀』、神戸新聞総合出版センター、1998年。
- 権田保之助『活動寫眞の原理及び應用』東京内田老鶴圃、大正3年。
- 権田保之助『民衆娯楽問題』同人社、大正10年。
- 小松弘『起源の映画』、青土社、1991年。
- 佐藤忠男『日本映画史 I 1896-1940』、岩波書店、1995年。
- 橘高広、『民衆娯楽の研究』、警眼社、大正9年。
- 田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』(中公文庫)、中央公論社、1975年。
- 田中純一郎『活動写真がやってきた』(中公文庫)、中央公論社、1985年。
- 田中純一郎著、本地陽彦監修、『秘録 日本の活動写真』、ワイズ出版、2004年。
- 塚田嘉信『日本映画史の研究 活動写真渡来前後の事情』、現代書館、1980年。
- 塚田嘉信『映画資料発掘 1～7』(私家版)、1970～1972年。
- 武部好伸『大阪「映画」事始め』(フィギュール彩)、彩流社、2016年。
- チャールズ・マッサー (岩本憲児編・監訳、仁井田千絵・藤田純一訳)『エジソンとその時代』、森話社、2015年。
- 都築政昭『シネマがやってきた 日本映画事始め』、小学館、1995年。
- 東京国立近代美術館フィルムセンター『カタログ 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより』、2004年。
- 永嶺重敏『怪盗ジゴマと活動写真の時代』(新潮新書)、新潮社、2006年。
- 筈見恒夫『映画50年史』、鱈書房、昭和22年。
- 長谷川倫子「劇映画製作会社からみたトーキー化までの日本映画界 (1)」『コミュニケーション科学』38、東京経済大学コミュニケーション学会、2013年、75～89頁。
- 前川公美夫編著『頗る非常 怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、新潮社、2008年。
- 御園京平+みそのコレクション『活辯時代』(同時代ライブラリー)、岩波書店、1990年。
- 吉田智恵男『もう一つの映画史 活弁の時代』、時事通信社、1978年。



---

吉田喜重・山口昌男・木下直之編『映画伝来 シネマトグラフと〈明治の日本〉』、岩波書店、1995年。  
四方田犬彦『日本映画史110年』（集英社新書）、集英社、2014年。

わかこうじ『活動大写真始末記』、彩流社、1997年。

『日本映画の誕生』（講座日本映画1）、岩波書店、1985年。

Charles Musser, *The Emergence of Cinema: The American Screen to 1917*, (History of The American Cinema 1), Charles Scribner's Sons, 1990.

Charles Musser, *Before the Nickelodeon: Edwin S. Porter and the Edison Manufacturing Company*, University of California Press, 1991.

※ 本稿をまとめるにあたり、アートクエイク代表安元哲夫氏には、資料提供などでたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げる次第です。